26P-pm236

理礼氏薬物学（第十六巻）にみる薬物

◯澤田　采佳[1], 島　和嗣[2], 畠山　貴博[3], 大垣　旭[4], 小松　知貴[5], 久保　光平[8], 小松　直登[6], 木村　壮太郎[7], 西野　ゆり[9], 林　優樹[10], 西野　正雄[11], 菰田　綾佳[12], 宮本　如奈[13], 高倉　弘士[14], 畠山　有理[15], 畠山　光弘[16]（[1]西浦高校, [2]金剛高校, [3]初芝富田林高校, [4]河南高校, [5]河南高校, [6]東住吉高校, [7]藤井寺高校, [8]四天王寺羽曳丘高校, [9]長野高校, [10]富田林高校, [11]早稲田大, [12]関西福祉科学大, [13]同志社大, [14]立命館大•院, [15]長崎大, [16]畠山獣医科）

「はじめに」・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第十六巻全文を解読し紹介する。

「内容」・・巻十六巻では転換機質の薬が紹介されている。書籍によると、転換機質薬は外用に用い、その部分に作用し、発炎あるいは壊滅させる薬品がこれに含まれる。就中作用は温和で、ただ毛細血管を興奮させ漿液滲出に至らないものは引赤薬という。またその分量を増加させると、表皮と真皮に間に漿液滲出を来すものは発泡薬といい、その部分の織質を壊滅させるのが腐食薬である。ただこの区別は確然著名ではないとしている。

発泡薬：芫菁、引赤薬：芥子、アンモニア、アンモニア擦油、ビュルゴンド松脂、カナダ松脂。腐食薬：腐食又苛性ポトアス、硝酸銀錠（腐食石）、クロロ亜鉛、クロム酸、重クロム酸ポトアスである。

「考察」・・引赤薬、発泡薬および腐食薬は、シーボルトの治療薬「十八道薬剤」にはない分類であり、著者自身が 毛細血管からの漿液滲出により引赤薬と発泡薬を区別しているが、これらの薬品の区別は確然著名ではないとし、補足的意味を持つものと思われる。十五巻と十六巻は一冊に綴じられた形で作られているが、一巻として成立させるには内容に乏しいものと考えられるが、理礼氏薬物学の巻構成を考える上では興味深い。芫菁は昆虫のハンミョウを用いた製剤であり、徳川 14 代将軍家茂公を治療した昆虫の湿布剤(芫菁げんぜい湿布剤)は、強い刺激作用があったとされているが、発泡薬及び引赤薬として松脂加芫菁硬膏にも用いられ、日本のパップ剤の黎明期における薬剤の使い分けが読み取れる。